

〔中〕 令和四年度 久留米大学附設中学校入学試験問題

国語科

注意 1 解答はすべて解答用紙に記入せよ。解答用紙だけを提出すること。
2 〔一〕～〔四〕の各問いで、字数を指定している場合は、句読点などを含んだ字数である。

〔一〕 設問と解答欄とは、解答用紙(全2の1)にある。

〔二〕 次の各問いに答えよ。

問一 次の①～③は、ひらがな四字で「●●える」という形になる言葉の説明文である。例にならって、それぞれふさわしい漢字一字を答えよ。

- 例 学問や技能を身につけるよう導く。【おしえる ↓ 教】
- ① 神仏や貴人に差し上げる。「神棚に――」
- ② 声を立て節をつけて読む。「念仏を――」
- ③ 勢いが盛んで順調に進む。「一族が――」

問二 例にならって①～④の敬語を完成させるとき、それぞれの() を埋めるのにふさわしい言葉を次のア～クから一つずつ選び、記号で答えよ。

- 例 おつしやる【言う・尊敬語】
- ① ご覧に() 【見る・尊敬語】
 - ② ご覧に() 【見せる・謙譲語】
 - ③ お目に() 【会う・謙譲語】
 - ④ お目に() 【見せる・謙譲語】
- ア する イ なる ウ いたす
エ なさる オ 入れる カ はいる
キ かける ク かかる

問三 次の①～④の二つの() には、ひらがな三字の同じ言葉が入る。それぞれを正しく埋めよ。

- ① その腕時計は() 高価で、私には() 手が届かなかった。
- ② 傘を忘れてしまった() に、買った() の服が雨にぬれてしまった。
- ③ 森の中は() 迷路そのもので、どちらへ進めばよいかわからなかった。
- ④ せっかくながらも忘れてしまった() 、それから() 数分もたてば完全に忘れてしまっていた。

問四 次の①～④の問いに答えよ。

① 「々」は、同じ漢字を続けて用いるときに二度目の漢字の代わりに書く記号であり、次のア～ウの傍線部は全て「々」という書き方をする熟語である。例にならって、「●」に当たる一字をそれぞれ答えよ。

- 例 準備はチャクチャクと進んでいる。【解答・着】
ア それについてはジュウジュウ承知している。
イ これまでの苦勞をセツセツと訴えた。
ウ 意味のない議論がエンエンと続いている。

② 「虚実」という熟語は「々」を二つ加えて「虚々実々」という四字熟語を作れる。同じやり方で四字熟語を作れないものを次のア～キから二つ選び、記号で答えよ。

- ア 奇怪 イ 苦楽 ウ 前進 エ 明白
オ 平凡 カ 子孫 キ 時刻

③ 原稿用紙に文章を書くときに、通常なら「人々」「国々」と書く熟語を特別に「人人」「国国」と書き、「々」の使用を禁じることがある。それはどのような場合か、左の説明文の() を十字以内で埋めて答えよ。

熟語の二文字目が、() 場合。

④ 「会社社長」「研究会会場」などの言葉を書くときには、「会社々長」「研究会々場」のように「々」を使うことのない場合が多い。その理由を、左の説明文の() を十字以内で埋めて答えよ。

続けて用いる同じ漢字二文字が、() から。

〔三〕 次のI・IIの文章を読んで、後の問いに答えよ。

〔I〕

① 文化ということばには、いろいろな意味や使い方があある。一般の人々はこのことばを、何等かの意味で文学、音楽、絵画といった人間の芸術活動に結びつけて理解することが多いようだ。また文化国家、文化人、文化的な生活のような表現から、何か香り高い格調のあるものとして文化を考える人も少なくないと思う。しかしこの本の中で私が文化と称するものは、ある人間集団に特有の、親から子へ、祖先から子孫へと学習により伝承されていく、行動及び思考様式上の固有の型(構図)のことである。文化をこのようなものとして捉えることは、今や言語学や人類学の領域では常識となつてゐる。たとえば日本人は自分のことを言う場合に、人指ゆびで鼻の先をさすようなことをする。これに反し、多くの西欧人は親指で胸のあたりを突くような動作をする。② この二つの異つた行動様式は文化の違いを示しているというふうにいふのである。つまり文化とは、人間の行動を支配する諸原理の中から本能的で生得的なものを除いた残りの、伝承性の強い社会的強制(慣習)の部分の部分を概念だと考えて頂いてよい。ところが人間の言語活動の大部分にも、このような文化の定義があてはまる。

人は生れ落ちたときには唯泣くだけである。しかし成長するにつれて、ことばを話すようになる。そして具体的に③どの言語を、どのような話すようになるかということは、彼をとりかこむ人々に全く依存しているのである。

(鈴木孝夫『ことばと文化』)

【II】

推理作家で、日本のSF小説の始祖と言われることもある、海野十三（一八九七〜一九四九）の「火星兵団」という作品に次のように語りがあります。

一般の人々にとっては、まさに寝耳に水をつぎこまれたような大きな驚きであった。

地球が、近く崩壊するのだ！

モロ〜彗星というやつが、われわれの住んでいる地球にぶつかるのだ！

右には「寝耳に水をつぎこまれたような」とありますが、「寝耳に水」というかたちでも使われる、いわゆる「ことわざ」です。

この「寝耳に水」はよく使われることわざの一つと聞いていいでしょう。そして、^④このことわざは江戸時代にすでに使われていました。

寝ている時に耳に水が入ったら……びっくりしますよね。実際にはそんなことはないわけですが、実際にあるかどうかではなくて、そういうことがあったらさぞかし驚くだろう、ということですね。「寝耳に水」とか「寝耳へスッポン」という表現もあるようですが、スッポンが入ったら困りますね。いや、大きさからいって入らないか。

さて、「寝耳に水」と似たことわざに「青天の霹靂」があります。「霹靂」は（かみなり）という語義の漢語です。英語には「A bolt out of the blue」あるいは「A bolt from the blue」という表現があつて、これが「青天の霹靂」とほとんど同じ意味になっています。フランスやイタリア、ロシアにも同じような言いまわしがあります。チベットには「雲一つない空（小鳥の頭ほどの雲もない）に斧のごとく雷が落ちる」といういいまわしがあつて、これも同じような表現ですね。

人間の生活はそれぞれの言語文化圏^{けん}によって、異なります。しかし、人間ですから、共通する面もあるわけです。同じようなこととがらを表現するのに、どのような言語表現を使うかということ、その言語によって構築されている文化（あるいは文化の中で使われている言語）によって違う場合もあれば同じ場合もあります。^⑤そこが人間の、そして言語のおもしろいところでしょう。同じような意味のことわざを、言語文化圏ごとに見比べてみるのもおもしろいと思います。

時間はお金と同じように貴重なものだから無駄にしてはいけないという意味の「時は金なり」ということわざがありますね。このことわざを知っていて、英語の「Time is money.」を知ると、「おお！ そっくり」と思いますが、なんのことはない、この英語を翻訳したものが「時は金なり」だったのです。

というように、発想が似ているのか、そうではなくて翻訳なのか、というところが大事なのですが、「一石二鳥」も「Kill two birds with one stone.」が翻訳されたものであることがわかっています。「一挙兩得」も同じような意味ですが、こちらは六四八年頃に成立した、中国の『晋書』にすでに使われています。

（中略）

ラテン語には「一人娘に婿二人を得る」という表現があるとのことですが、これははたして「一石二鳥」と同じ意味なのか、と思ったりもします。ややこしくないでしょうか。オランダやハンガリーには、「一撃で蠅を二匹うつ」、イタリアには「一粒の豆で

二羽の鳩をとらえる」、ロシアには「一撃で二羽の兎をたおす」、台湾には「アサリ採りとズボン洗いを兼ねる」や「一つの餌で魚二匹」という表現があるようです。何を二つ得るのか、というところにお困柄、つまり言語文化があらわれているようでおもしろいですね。

（今野真二『日本語の教養100』）

問一 傍線部①「文化」とあるが、『明鏡国語辞典』（第三版）では、「文化」の意味を次のように説明している。これを読んで、後の各問いに答えよ。

ぶんか【文化】①ある民俗・地域・社会などでつくり出され、

その社会の人々に共有・習得されながら受け継がれてきた固有の行動様式・生活様式の総体。

②人間がその精神的な働きによって生み出した、思想・宗教・科学・芸術などの成果の総体。物質的な成果の総体は特に「文明」として区別される。

③世の中が開けて、生活水準が向上すること。

(1) 右の①〜③の説明のうち、文章Iの中で筆者が「文化」だと考えているものに当てはまるものを選んで、数字で答えよ。

(2) 文章Iの中で、筆者が「文化」だと考えているものの具体例としてふさわしくないものを次のア〜オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 蒸し暑い日本では、夏になると浴衣を着て花火大会などに出かけること。

イ 西欧人が他人とあいさつをする時に、相手と心を通わせるために握手をすること。

ウ 時間に追われている現代人が、食事時間を短縮するためにファーストフードをよく食べること。

エ 生まれてすぐの人間の赤ちゃんが、命を維持するために母乳を飲むこと。

オ 老年を迎えても健康で充実した人生を送りたいと考えて、ジョギングなどの運動をすること。

問二 傍線部②「この二つの異った行動様式は文化の違いを示している」とあるが、どういうことか。それを説明した次の文章の空欄a・bに入る語句をそれぞれ漢字一字で答えよ。

日本人が自分のことを言う場合に、人指ゆびで鼻の先をさすようなことをするのは、aが自分の存在を象徴すると考えているからである。このことは、日本では「aに泥を塗る」などの慣用表現が使われることからわかる。一方、多くの西欧人が親指で胸のあたりを突くような動作をするのは、bを自分の存在の本質ととらえているからだと考えられる。「Get something off one's chest.（胸を開く、打ち明ける）」などの慣用表現からそのことがわかる。

問三 傍線部③「どの言語を、どのように話すようになるか」とあるが、それを説明した次の文の空欄c・dに入る漢字二字の語句を、それぞれ文章Iから抜き出して答えよ。

「へえ。あの子は、寺育ちのくせに、どういふものかと、んかつが好物でやんして……。」

母親は、はにかむように笑いながらそういった。

だから、夕食には、^④「これまででいちばん厚いどんかつをじつくりと揚げて出した。しばらくすると、給仕の女中が降りてきて、

「お二人は、しんみり食べてますよ。いま覗いてみたら、^⑤お母さんの皿はもう空っぽで、お子さんの方はまだ食べてます。お母さんは箸を置いて、お子さんがせつせと食べるのを黙って見てるんです。」

といった。

それから一年近く経った翌年の二月、母親だけが一人でひよっこり訪ねてきた。面会などしないと強気でいても、やはり、いちど顔を見ずにはいられなくなったのだろうと思つたが、そうではなかつた。修行中の息子が、雪作務のとき僧坊の屋根から雪と一緒に転落し、右脚を骨折して、いまは市内の病院に入院しているのだという。

「もう歩けるふうでやんすが、どういふことになつてゐるやらと思ひましてなあ。」

相変わらず地味な和装の、小鬢こびんに白いものが目につくようになつた母親は、^⑥決して面会ではなく、ただちよつと見舞いにきただけだといった。

息子の手紙には、病院にきてはいけない、夕方六時に去年の宿で待つてゐるよにとあつたというから、

「じゃ、お夕食は御一緒ですね。でも、去年とは違いますから、なにをお出しすればいいのかしら。」

「さあ……修行中の身ですからになあ。したが、やつぱし……。」

「わかりました。お任せください。」

と引き下がつて、女中に^⑦どんかつの用意をいつけた。夕方六時きつかりに、衣姿の雲水が玄関に立つた。びっくりしつかり消えて、見違えるような凜れんとした僧になつてゐる。去年、人前では口を嚙くはんだままだった彼は、思いがけなく練れんれた太い声で、

「おひさしぶりです。その節はお世話になりました。」

といった。それから、調理場から漂つてくる好物の匂いに気づいたらしく、ふと目を和ませて、こちらを見た。

「……よろしかったでしょうか。」

^⑧彼は無言で合掌の礼をすると、右脚をすこし引きずるようにしながら、母親の待つ二階へゆつくり階段を昇つていった。

(三浦哲郎「どんかつ」)

問一 傍線部①「あまりの思いがけなさ」とあるが、「思いがけなさ」を感じたのはなぜか。その理由として適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 少年の頭が、外出前とは違つてあまりにも青々と剃り上げられていたから。

イ 頭を丸めて雲水の姿になるには、少年の姿は痛々しいほど可憐可愛だったから。

ウ 親子が、約束通りの時間に、二人そろつて旅館に帰つてくるとは思つていなかったから。

エ 少年が、何か大変なことをしてしまつて、頭を丸めたのではないかと思つたから。

オ 少年が、一日で雲水になつてしまふとは、予想もしていなかつたから。

問二 傍線部②「この親子にまつわる謎」とあるが、「謎」とは具体的にどのようなことか。簡潔に説明せよ。

問三 傍線部③「どんかつ」と⑦「どんかつ」にはそれぞれ強調の働きの傍点が付されているが、どのようなことが強調されているか。それぞれ説明せよ。

問四 傍線部④「これまででいちばん厚いどんかつをじつくりと揚げて出した」とあるが、ここには旅館の女将のどのような思いが込められているか。説明せよ。

問五 傍線部⑤「お母さんの皿はもう空っぽで、お子さんの方はまだ食べてます」とあるが、これは二人のどのような様子を言つてゐるのか。分かりやすく説明せよ。

問六 傍線部⑥「決して面会ではなく、ただちよつと見舞いにきただけだといった」とあるが、「母親」がこのように言つたのはなぜか。その理由として適当なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 五年間の修行が終わるまで息子とは面会しないという決意を翻ひるがへしたわけではないことを示すため。

イ 息子に会いたいという気持ちをどうしても我慢できずにこへ来たことをごまかすため。

ウ 息子のけがも心配だが、それよりも修行について行けてゐるかがどうしても気になつたから。

エ 息子に面会に来たと言うと、旅館の人になぜ今頃こへきたのか怪しまれると思つたから。

オ 自分では来るつもりはなかつたが、不本意ながらこへ来たことを旅館の人に示すため。

問七 傍線部⑧「彼は無言で合掌の礼をする」とあるが、この動作には「彼」のどのような気持ちが表れているか。説明せよ。

問八 本文の内容、表現の特徴を説明したものととして適当なものを、次のア～オから二つ選び、記号で答えよ。

ア 遠くからはるばる訪れた親子連れの様子を、第三者の視点から客観的に描写している。

イ 親子のうち、母親の心情を直接的に描くことによつて、息子のことを心配する母の思いがリアルに描かれている。

ウ 方言を含んだ登場人物の会話を取り入れることで、その土地に根ざした人々の暮らしぶりが浮かび上がるように描かれている。

エ 息子の細かな仕草や態度の描写から、その少年らしさと、時を経て成長している様子が示されている。

オ 旅館の女将と女中のコミカルなやりとりが、ともすれば悲劇的になりがちなストーリーに救いをもたらしている。

カ 「どんかつ」といった傍点や「……」のような記号を用いることで、登場人物の心情を暗示している。

☐ 解答は解答用紙(全2の1)に書け。

*印の欄には記入しないこと。

受験番号

☐ 問一

①

②

③

☐ 問二

①

②

③

④

☐ 問三

①

②

③

④

☐ 問四

①

ア

々

イ

々

ウ

々

②

☐ 問四

③

④

☐ 問一

(1)

(2)

問二

a

b

☐ 問三

c

d

e

問四

☐ 問五

g

☐ 問五

h

☐ 問六

☐ 問一

☐ 四 *

☐ 問二

☐ 問三

③

☐ 問三

⑦

☐ 問四

☐ 問五

☐ 問六

☐ 問七

☐ 問八

☐ *

☐~☐ *

☐ *

*印の欄には記入しないこと。

受験番号

□ これから読まれる文章をよく聞いて、後の問いに答えなさい。なお、読まれるのは一回だけなので、解答欄の余白にメモを取りながら聞きなさい。

問一 「玄知」は梅の木を買うお金をどのようにして用意したか。

問二 「玄知」はなぜ、買った梅の木を持ち運ぼうとしなかったのか。

問三 「百姓」はなぜ、「玄知」にお金を返そうと思ったのか。

問四 「百姓」がお金を返そうとするのを、「玄知」はなぜとめたのか。

(注) 茶道(さどう) || 茶の湯をつかさどる役職。

大隈候(おおくまこう) || 大隈重信。明治時代の政治家。

貪った(ぼった) || 金額を不当に高くした。

持ち慰んだ(もちなぐさんだ) || 愛用していた。

金子(きんす) || お金。

懷中(かいちゆう) || 着物のふところの中。

瓢(ひさご) || ひょうたん。容器として用いた。

叱言(こごと) || 文句。不平を言うこと。

胡散(うさん) || あやしい。不審な様子。

問一

Blank answer box for question 1.

問二

Blank answer box for question 2.

問三

Blank answer box for question 3.

問四

Blank answer box for question 4.

* []

* []

出雲松平家の茶道に、岸玄知という坊主が居た。ある時松江の市街外れをぶらついていると、穢い百姓家の垣根に花を持った梅の樹が目についた。梅は大隈候のように老齢で、おまけにまた大隈候のように杖に凭りかかっていたが、玄知はその姿が気に入ったので、早速百姓に掛合ってみると、百姓は幾らか貪った値を切り出した。

玄知は家にかえって、これまで持ち慰んだ茶道具の幾つかを売払った。そして金子を懐中に、いそいそと百姓家を訪ねて往った。取引が無事に済むと、玄知は腰にした瓢をほどいて、花の下で酒を飲み出した。百姓が夕方外から帰ってみると、玄知は花の下で狗ころのように鼾をかきながら転寐をしていた。

それから幾日か経ったが、玄知は一向樹を持ち運ぼうともしないで、毎日のようにやって来るので、百姓は不思議でならなかった。

「旦那。一体あの梅の樹はどうしてくれるだね。」

「どうもしないよ。あのままさ。」玄知はけろりとした顔をしていた。

「だって、お前様、高い金出して、俺がの買取ったじゃねえか。」

「そうさ、買取るには買取ったが、うちは邸が狭いから、いままで通りお前の許に預けておくつもりだ。」

百姓は麦飯と水とで出来た自分の哲学では説き難いものに出会したように、頭へ手をやった。

「預かれなら、預かりもしようがの、実が生ったら持って往くだかね。」

「いや、実是要らない。」玄知はその梅の実のような円い頭をふった。「乃公は花を見ればいいのだ。実はお前にくれてやるから、精々樹に気をつけてやってくれ。」

「実是要らねえだって。」百姓は眼を見張って不思議な茶道の顔を見た。「俺実が生るから金を貰っただ。花見するだけなら、お前さんが幾度来たって彼是叱言いう俺でねえだ。金は返すだよ。」

百姓が金を取りに家へ帰ろうとするのを、玄知は遽って引きとめた。

「いや、止しにしてくれ。花がお前のものなら、幾ら見たって面白くない。自分のものにして初めて熟々と見ていられるのだから。」

百姓は自分の知らなかった珍しい嘘でも聞かされたように、胡散そうな表情をして首をふった。

令和4年度

中学入試 国語

訂正

◎問題 全4の2 下段 問一

ぶんか(文化)①ある民族

◎解答 全2の1 (注)

大隈候